『演題：難しいがんに立ち向かう』

講師名：

小玉 美智子（こだま みちこ）

学 歴 ：

1994 年　広島県ノートルダム清心高等学校卒業

2000 年　大阪大学医学部医学科卒業

2012 年　医学博士（大阪大学医学系研究科産科学婦人科学教室　論文博士）

職 歴 ：

2000 年　大阪大学医学部附属病院産婦人科

2001 年　泉大津市立病院産婦人科

2003 年　大阪府立母子保健総合医療センター産科

2005 年　大阪府立急性機総合医療センター産婦人科

2009 年　日生病院産婦人科　医員

2013 年　University of Texas MD Anderson Cancer Center, Research Intern

2013 年　Houston Methodist Research Institute, Postdoctoral Associate

2016 年　大阪大学大学院医学系研究科　産科学婦人科学教室　助教

2024 年　大阪大学大学院医学系研究科　産科学婦人科学教室　講師

2025 年　大阪大学大学院医学系研究科　産科学婦人科学教室　教授

講演の概要：

みなさんにとって、「がん」と聞いて、どのようなイメージを持つでしょうか？「恐ろしい」、「治らない」、「痛そう」、などなど色々なイメージがあるかもしれませんね。

医学が進んだ今、がんは治る病気になりつつあります。それでも、日本の死亡原因の第 1 位は、今も「悪性新生物（がん）」です。何故でしょうか？

それは、「治療が効きにくいがん」、「一度は消えたように見えたのに再発するがん」、「とても珍しくて治療法が確立されていないがん」など、いわゆる”難しいがん”が存在しているからです。

私が専門としている産婦人科は、妊娠・出産だけでなく、すべての年代の女性の病気を診る診療科です。その中には、婦人科がん（子宮がん・卵巣がんなど）も含まれます。

例えば若い女性でも起こる子宮頸がんは、放射線治療が有効である場合が多いのですが、治療が効かない場合や再発してしまった場合、命を救うのが非常に難しくなります。また、卵巣がんは、見つかった時にはがんがお腹の中に広がっている、いわゆる”進行がん”となっている場合が多く、再発率が非常に高い、婦人科がんの中で最も危険ながんと言われてきました。

今回は、私が何故この「難しいがん」に立ち向かおうと思ったのか、どのような研究に取り組んでいるのか、産婦人科医としての実体験をもとに、みなさんにお話ししたいと思います。研究や医療に興味がある人の、気付きになると嬉しく思います。

『演題：月の科学の最前線　～たかが月、されど月～』

講師名：

寺田　健太郎（てらだ　けんたろう）

学　歴　：

1985 年　兵庫県立鳴尾高等学校　卒業

1989 年　大阪大学理学部物理学科　卒業

1991 年　大阪大学理学研究科物理学専攻前期過程修了

1994 年　大阪大学理学研究科物理学専攻後期過程修了。博士（理学）

職　歴　：

1994 年 7 月～　広島大学理学部・助手

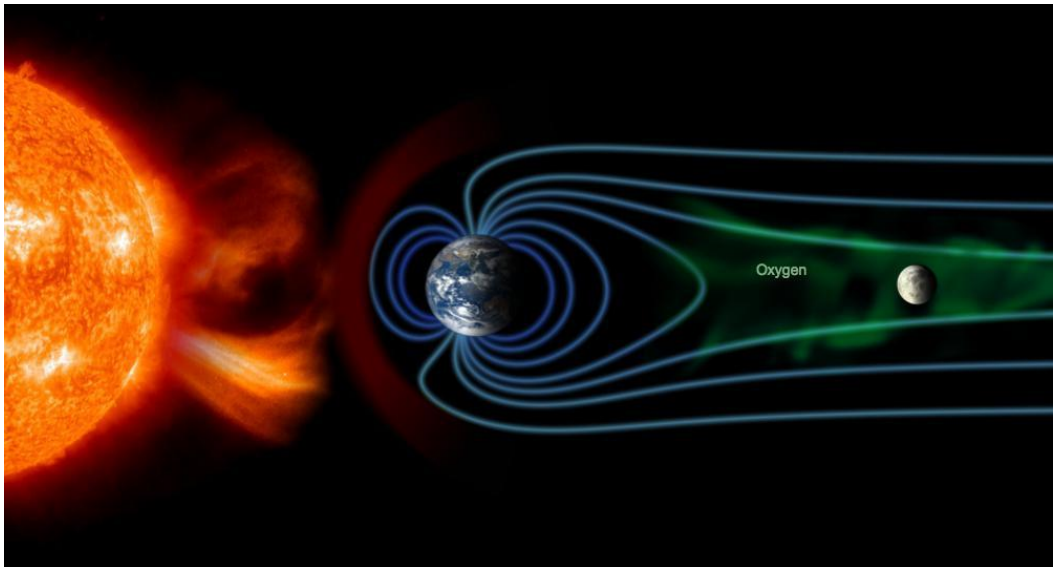
2006 年 3 月～　広島大学大学院理学研究科・助教授（昇進）

2007 年 4 月～　広島大学大学院理学研究科・准教授（職名変更）

2010 年 10 月～　広島大学大学院理学研究科・教授

2012 年 4 月～現在　大阪大学大学院理学研究科・教授

2025 年 4 月～現在　大阪大学　総長補佐・21世紀懐徳堂副学主

講演の概要：

お月見、潮の満ち引き、昔話（月のうさぎ、かぐや姫）など、私たちの暮らしに馴染みの深い月。科学的には、惑星に対する大きさの比が大きい「特異な衛星」として知られています。当日は、実際に月の石をお見せしながら、高精度な同位体分析や月周回衛星「かぐや」によるイオン観測から明らかになってきた「月の最新像」について紹介します。普段は 38 万 km 離れている「月」をどうぞ身近に感じてください。講演会後、月の見え方が変わるかも？